

領主より拝領した茶器

南蛮写横手急須

(草津宿本陣蔵)



史跡草津宿本陣には江戸時代から近代までの歴史資料が1万6千点以上と美術工芸品が約500点伝わっています。美術工芸品には、本陣の建具に絵画などをあしらう障壁画や、本陣を利用した大名らから拝領した掛軸・陶磁器・漆器など、さまざまなものが見られます。

今回ご紹介するのは、江戸時代に草津宿を領有した膳所藩の藩主から拝領したと伝わる「南蛮写横手急須」です。

箱書きに「康禎公御作(やすさだこうおんさく)」とあり、膳所藩主・本多家の12代当主である本多康禎の作とされています。大正7年(1918)の記録には本多康禎が当本陣で小休(小休憩)した際に拝領した康禎作のものと記されています。大福帳の記録によると康禎の当本陣利用は2度あり、そのうち天保2年(1831)6月28日のみ小休での利用であるため、この時に拝領したものではないかと考えられます。大福帳に急須拝領の旨は記されていませんが、風流人として知られる当本陣8代当主・田中七左衛門貞澄(さだすみ)が敷地内に庵(いおり)を設け隠居し、大名ら

と交流していた時期であるため、本作はその中で拝領したのかもしれませんが。

資料名にある「南蛮写」とは、南蛮焼(なんばんやき)(南蛮陶磁)を模したものを指します。南蛮焼は、16~17世紀頃に南蛮貿易を通じて中国南部や東南アジアから伝わった陶器です。釉薬(ゆうやく)をかけずに高温で焼き締める作風のもが多く、素朴で独特な風合いが茶人に好まれました。また「横手」とは注ぎ口に対して横に取っ手がついたものを指し、日本独特の急須の形です。

本作を見ると、急須の各部がそれぞれろくろで作られています。器形(きけい)や厚みの調整などから、丁寧な製作がうかがえます。硬く焼き締められた深い黒茶色のきりっとした色彩でありながら、全体が両手で包み込めるほどの大きさで、注ぎ口も小ぶりであり、底のすばまった器形であるため、華奢(きゃしゃ)でかわいらしい印象にも感じられます。

(令和8年8月・草津宿本陣 川田 千紘)